

「被害者遺族」ひとりひとりに耳を傾けて



笑顔が素敵な皆さん。実は私（右下）以外、殺人事件や自死で大事な家族を亡くした「被害者遺族」です。私たちは遺族の方に取材でマイクを向けることがあります。打ちとけて話すことはあまりありません。でもそのことが「暗い」「近づきがたい」イメージを作り出して、時には遺族の方を苦しめていることがあるのではないかと。そんな思いから、本音で話す「オンライン座談会」を開いてみることにしました。

（丹沢研二アナウンサー）

明るい「被害者遺族」との出会い

事のはじめはおとし12月。

ラジオのインタビュー企画で、世田谷一家殺害事件の被害者遺族・入江杏さん取材したことでした。



世田谷一家殺害事件は2000年末、40代の夫婦と幼い子ども2人の一家4人が殺害された事件です。犯人はまだ見つかっていません。入江さんは亡くなった宮沢泰子さん（当時41歳）の姉で、事件当時は壁一つ隔てた隣の家に住んでいました。自身の悲しみと向き合う中で「グリーフケア」という取り組みに出会い、今は多様なアプローチでグリーフケアの啓発と普及を行っています。（※グリーフとは喪失にと

もなう深い悲しみや悲嘆のこと)

あるとき私は、入江さんと一緒に活動している方、それを応援している方々、また、グリーフケアに関心があるなど様々な立場の方々と、食事やお酒の席でご一緒する機会を得ました。

この時に出会ったのが、一人娘をいじめによる自死で亡くした小森美登里さんと、娘を同級生の少年に殺害された中谷加代子さんです。はじめは「無神経なことを言って傷つけてしまってはいけない」と緊張していた私ですが、和やかで冗談もとびかう雰囲気いつの間にか笑顔になっていました。

入江さん、小森さん、中谷さんの3人とも、明るくてパワフル、そして人の話を真剣に聴く姿が印象的でした。私の拙い意見にも深くうなずきながら答えを返してくださいました。

私が「被害者遺族」に漠然と抱いていた「暗い」「近づきがたい」イメージとは真逆でした。

「この会話をそのまま番組に出来ないかなあ」と話していたのですが、「オンライン座談会」なら出来るかもしれないと企画を持ちかけたところ、快諾してくださいました。

初めから笑えたわけじゃない



丹沢) みなさん、よろしくお願いします。

和気あいあいと話すには重いテーマではあるんですが、初めての人と会う時に被害者遺族として特別な目で見られていると感じることはありますか？

入江) そうですね。この前 WEB メディアの若い方たちがインタビューに来てくださったんです。私の本を読んで、家族の自死など、他人に話したら相手が戸惑うような「悲しみ」をどう伝えたらいいか？と訊きに来てくださったんです。会うなり、まず私がびっくりするぐらい明るい雰囲気なので驚いたって言ってくださったんですけどね。はじめはすごく緊張してらっしゃったのがよく伝わってきて…やはりそれだけ事件の遺族に会うということは、すごく重いものとして受け取られているんだなというのは感じました。

丹沢) 私も、今もそうなんですけど、私が不用意に言った発言が一番傷つく所に刺さって傷つけてしまうんじゃないかという気持ちもあって、非常に言葉を選ぶ所はあります。

たとえば小森さんは娘さんを自死で亡くされていて、そのことを周りの人が話題にすることについて、どのように捉えていましたか？

【小森さん写真】

小森美登里さん 神奈川県出身 1998年、高校入学間もない一人娘の香澄さんをいじめによる自殺で失う。

小森) 自殺の場合は「被害者責任論」というのを多くの方が持っています。「自殺した人はきっと弱いんだろう」とか「弱い子を育てた親の教育にも何か問題があったんだろう」という形で、社会が自殺というものに対してのネガティブな印象を持っている。たとえば私がスーパーに行った時に、地域の人みんな私が「娘が自殺した遺族」だということは知っていて、私の姿を見かけると、私の前に道ができるみたいな、そういう経験もしたことがあるので、周りの人がどう私と関わったらいいのか分からないだろうなっていうのは十分理解できますね。

丹沢) 中谷さんは「被害者遺族のイメージ」と実際のギャップを感じたことはありますか？



中谷加代子さん 山口県出身 2006年、当時20歳だった長女の歩さんが同級生の少年に殺害される 犯人の少年はその後自殺した

中谷) 取材に来られる方がすごく緊張しているなあと感じることはありますね。リラックスしてこっちが待っていても、今の状態をそのまま見せちゃ逆に変な違和感を与えちゃうんじゃないかって気もして、ちょっと気を遣う所はあります。

でも誤解がないように言いますけど、お酒を飲むとか笑うとかそういうことは、最初はできなかった。何年もお酒が飲めなかったり、笑っちゃいけないと思って笑わないじゃなくて本当に笑えなかったり、人の顔が見れなかったり、そういう時期もあったし、今は多少気を遣いながらそれが出来るようになってきましたけど、最初はこういうことに気持ちが悪く向けれなかったし、そういうどん底を経験して今があるのだと思います。

入江) 私も、そうでした。当時はできなかった。お酒を飲むどころか、人前で笑うこともできない時期がありました。万が一にでも不真面目だと見られてしまったら、「あんな親族がいるんだからあんな目にあってもしょうがない」みたいに言われてしまっただけは、亡くなった人たちに対して申し訳ない。そう思っ

て、襟を正し、必要以上に憤り深く生きなくちゃいけないって思っていた時期もありました。

中谷) 最初はね、娘に恥をかかせちゃいけないと。娘の親がだらしなかったら娘が悪く思われるんじゃないかっていう気持ちで、ふんばっていきゃいけないという感覚で立っていたような気がします。

矛盾を矛盾のままに受け止めてほしい

想像を絶する悲しみを経験した3人。

明るく話してはいますが、様々な偏見に満ちた「世間の目」に苦労することも多かったといいます。

私の胸の中には、前に入江さんを取材した時に聞いたこんな言葉が残っています。

「マスコミが常套句として使う『遺族の時間はあの日から止まったまま』という言葉に違和感がある」
気持ちは時とともに変化しているのに、取材される時はいつも「同じ答え」を要求されるというのです。

「止まったまま」なのは、私たちの方なのではないか。

そんな疑問も聞いてみました。

入江) 被害直後ってただただ涙が零れてきて・・・、取材も受けられない状態でした。もし、そのときに事件についての取材を受けたら、いかにも世間の思うような被害者遺族像に自ずとなっていたと思うんです。未解決のまま20年近く経つ中で、もちろん当初と同じ感情ではない。それなのに、ついつい取材意図を汲んで、未解決事件の遺族らしい発言をしてしまう。「今の心境をそのままに伝えたら世間の方には分かってもらえないんじゃないか」と忖度してしまうんです。忘れたい、けれど忘れたくない、忘れてはならない、でも忘れたい、という矛盾した感情を抱えている。ただ、そういう矛盾した感情をそのままに差し出して、理解してもらえるだろうか、とためらってしまう自分がいます。そうした私の思いを、作家の平野啓一郎さんが、私との対談の中で、「矛盾を矛盾のままに共感し分かち合う聴き方が必要ではないか？」と口火を切って、会場に問いかけてくださいました。実は、そのときの講演録をまとめた書籍を昨年11月に出版しました。

見えない涙を見、発されない声を聴く「グリーフケア」にとって「矛盾を矛盾のままに受け止める」ことは、すごく大切なことだと感じます。

丹) それは取材してマイクを向ける側からすると非常によく分かる話です。事件から1年後と10年後は違うわけですね。私たちはその変化についていけないんですね。取材でマイクを向けられながら、「こういうことを答えてほしいんだろなあ」というのは感じるものですか？

小森) それは十分感じていて、こういうものを作りたくて、それに必要な私たちの発言を導こうと思って一生懸命努力されているのを明白に感じてしまうことは正直言うとありますよね。

伝えたいことが本当にストレートに伝わらなくて、亡くなった子どもを美化する表現をすごく作り込んでいたりとか。「かわいくて勉強が出来て」とか。うちの子は勉強なんか大嫌いだったし、本当に普通の子なのに脚色をしてその子の印象を作り込んだりとか、そういうことはしてほしいくない。そうじゃなくて、この経験をした遺族が伝えたいことはここなんだよということを何かうまいこと引き出して、そ

こで作ってほしいなという無理な願いはいつもしますね。

中谷) 殺人事件のことを報道しようと思えば、どうしても耳を覆いたくなるような言葉遣いにはなりませんね。残念なことだけど、それが事実なんです。事件の悲惨さを想起させるようなイメージ映像が流れたりもしますし、刺激的なコメントがつけられたりもします。そういう伝え方をした方が、受け手にわかりやすいのかなとも思いますが、とてもいたたまれませんでした。

例えば、私が続けている「命の授業」を取材したいという申し出があっても、これを受けたとしても、「命の授業」についてはなかなか盛り込んでもらえない。そんな経験も確かにありました。それでも、取材にお応えしているのは、私の言葉を、一人でも多くの方に届けてもらいたいと願ってのことです。

丹沢) 私もこれまでと違う伝え方を模索したいと思っています。この場もその一つなんですが…。

「矛盾したものを矛盾したまま受け止める」というのは難しいことですね。

入江) 確かに難しいことかもしれません。以前、記者の方から「遺族取材だけでなく、ほとんどが取材拒否でとっても辛いんです」と相談を受けたことがありました。取材相手から取材拒否されてしまうのは、本当に辛いですね。

相手の真意を伝えたくて取材しようとしているのに、あるいは公共性を問う取材なのに、「また、同じようなメッセージでしょ」と受け手が食傷気味になってしまうことも。最近は、テンプレ取材などという言葉も聞かれますね。そうした取材は、実は取材者も、被取材者も、そして受け手も求めていない。

一方で、メディアは信頼をつなぐ重要な役割を担っていると思うんです。矛盾した思いを受け手の心に届くように伝えること、無関心に関心に変えていくように伝えていただけたら嬉しいです。

「加害者に寄り添う」という選択

「遺族が伝えたいこと」も、十人十色です。

【講演している写真】

小森さんや中谷さんは少年院や刑務所での講演活動に力を入れています。対象は、加害者にもなりうる若い人たち。2人は被害者遺族でありながら「加害者に寄り添う」ことを目指しています。

丹) 小森さんと中谷さんに、なぜ加害者に寄り添おうと思ったのか改めて伺ってもいいですか？

小) 私の目的は再発防止だからです。「自分ってとんでもないことをしてしまったのかもしれないなあ」って反省を促すために必要なことが、自分の苦しみと、本当は自分も幸せに生きたいんだって思っている気持ちに気づくことだからです。自分が幸せに生きたいと思った時に、奪ってしまったものも見えてくるんじゃないかなと思ったんですね。

ただちょっと私の場合は裁判とかやっちゃって、娘が亡くなって10年間、裁判の中で証人尋問とかで加害者と直接会ってしまう経験とか、加害者側から反論を受けたり、学校の隠蔽とか虚偽っていうのと10年間戦っちゃったから、傷が深すぎて、加害者の背景に寄り添うとか言っちゃっている割には香澄の加害者とはもう関わりたくないということは払拭できなくなっちゃっていますね。

丹) でも再発防止を考えると、加害者にアプローチしていかないということですね。

小) そうですね。それで少年院とかで講演させていただくと、子どもたちが本当に深い所でその部分を感じてくれているというのが、感想文ですごく実感することが出来るから、続けられるんじゃないかなと思います。



ちょっとだけ読んでいいですか。これ17歳の男の子なんだけど。「いじめをしている人は楽しいのかもしれないませんが、それは悲しみの中の一部の感情だと思います。きょうの質問の中に、『いじめられる人に原因があるか?』というものがありませんでしたが、僕はいじめられる人に何か原因があるんだと思います」っていうことで、この子も加害者側に寄り添うように書いてくれているんですね。

丹沢) 中谷さんはどうして「加害者に寄り添おう」と思ったんですか?

中谷) 歩の加害者は自殺したので今この世にいないので、直接何かを言ったりとか、悔悛の情を示してほしいとかいうアプローチはできないんですね。でも同じような事件や犯罪がこの世からなくなってほしいし、そのためにはどうしたいだろう、なぜこの事件が起きたんだろうという根本の所をずっとずっと考えてくると、彼の意味だとか人生に対する思いだとか周りの人に対する考え方だとか、それが変わってくれたら事件がなかったかもしれないなって。

なので歩と同じように私たちと同じように悲しい思いをする人がなくなるためには、私は彼にしてほしいことを今生きている人にお話してお話ししていきべきなのかなって。今の活動の原動力の一つはそういう思いですね。

「分かりにくい」から「叩かれる」

しかし、小森さんや中谷さんの「加害者に寄り添う」という思いは、周囲から理解されにくく、バッシングを受けてしまうことも多いと言います。

3人は「人権の翼」という団体で、犯罪を減らすための講演活動などを行っています。入江さんが小森さんや中谷さんと一緒に活動しようと思った理由が「きっと彼女たちはバッシングされてしまうに違いない」「バッシングされるなら孤立させてはいけない」と考えたからだということです。

丹沢) 入江さんは小森さんや中谷さんの活動を見た時にすぐ「バッシングされてしまう」と思ったんですね。そういうことはよくあるんですか?



入江杏さん

入江) 叩かれている人を目の当たりにもしました。被害者遺族の立場もそうですが、傷つきやすい状態にあるときに、バッシングされるようになったら、どんな人も弱ってしまい、さらに生きづらくなってしまいます。悲しみから再生に向かうどころではなくなってしまう。悲しみから再生していく上で、まず大切なのは、孤立させないということ、一人にしないということ、「関わり」です。関係性といってもいいかもしれません。叩かれている人を見たら一人にしない、守るというのもおこがましいんですが、私自身叩かれる立場になってしまうとしたら、すごく怖いことなので、何かできることがあったらいいんじゃないかと思いました。

丹沢) 実際に「被害者遺族が加害者に寄り添う」という活動で誤解を受けたりバッシングを受けたりということは、小森さんや中谷さんはありましたか？

小森) ずいぶんありました。遺族にも色んな考えがあるというのもそうだけでも、それぞれみんな違うんだということをなかなか認識し合うことが出来ないから、ちょっと違うなという意見があるとそこを自然に叩かれてしまいます。

中谷) 一番叩かれるのは遺族同士の時。遺族同士だとある程度、内輪の話もするじゃないですか。そうすると心の深い所で「違うぞ」というのもすごく認識するんですね。一番違いを感じるのは加害者に対する思い。加害者には何が何でも厳罰を与えてほしいという感覚の方もいらっしゃるし、そうじゃない人もいるし、なので中には相手のことを許せなくなっちゃう人もいるわけですよ。

「理解できないものをつながる」ためには

「理解できない」から叩かれてしまう。それでは被害者遺族は沈黙せざるを得なくなってしまう。最後に3人に、その状況を何とかするための方法を聞きました。

丹沢) 被害者遺族でも支援者でも、私たちのような人間も、みんな考え方とかスタンスとかバラバラで、でも理解できないものをバッシングするということで、傷ついている人をより傷つけてしまうような、良くない方向に行くこともあると思うんですけど、スタンスの違う3人が一緒に活動できているように、「理解できないものをつなげる」ためには何が必要なんですか？

小森) 何か攻撃の対象を見つけると、自分のストレス発散なのか分からないけれども一気に集中して、被害者責任論で蔓延しちゃって、誰もそれに対しておかしさに気づかない。今そういう空気感がすごく多いってというか、この部分をお互い認め合うって所をどうやってね、人権をテーマに伝えていけるのになってというふうには思っています。

入江)

理解できないものどうつなげるか・・・すごく難しい質問です。「理解できない」と切り捨ててしまうと分断が生まれてしまう。そうではなくて、どうしたら分断を生まないかということ、いつも考えています。

「悲しみから学ぶグリーフケア」が私にヒントをくれました。私たちは皆、違う考えを持ちながらも、普遍的なものもあると思います。その一つは、悲しみ。「悲しみ」は「愛しみ」でもあります。私は、「誰の心の中にもある悲しみの共通の水脈」という言い方をしています。「悲しみ」は心の中にひたひたと広がって、静かに浸透していくもの。もしかしたら「悲しみ」は、理解できないものともつなげるきっかけになるんじゃないかと感じています。

丹沢) 中谷さんはいかがですか？

中谷) 私、人間ってもともと共感したいものなんじゃないかと思うんです。人と共感し合いたい。だから「人はどうなんだろう」って思って想像して下さるから「私だったら許せないよ」とかイメージを持たれる。自分と違うイメージになった時にバッシングになったりするんだと思うんですけど、「想像する」ってせっかくして下さる共感のスタートを、もっと具体的に、目の前の被害者、この人だったらどうだろうと1個1個を見てほしいなと思うんです。

入) 目の前の人を見る。そうね。

中) 一つずつを見た時に、きっと一つずつは「あ、このパターンは、この人はきつこうかもしれない」って、違いを発見してほしいって思うんですよね。私たち3人も全然違う個性の3人だと思うんです。でもある部分、非常に似ているところ共感できる場所、立ち位置や気持ちの面で、「あ、ここ寄り添いたい」って思う所が私はあるんですね。なので、2人といるととっても心が穏やかになるというか、ほっとするというか、そういう部分が発見できると、何か一緒にやっていける気がするんです。違う人たちなんだけど、どこか似ている所とか一緒にやっっていけそうな所が見つけれられるように、1個1個丁寧に見てほしいなって思います。

一人一人を丁寧に見て、通じ合える点を見つける。当たり前のようにいてなかなか難しいことです。

報道に関わる人間として、また私たちの身近な人が「遺族」となったとき、どのように関わっていくのか。今回のように当事者の話を聞き、自分の思い込みを修正しながら試行錯誤していくしかないかもしれません。



聞き手：丹沢研二アナウンサー

仙台→福島→佐賀→京都を経て東京アナウンス室。人権問題やコロナ禍の貧困をテーマに取材を続けている。新年度からは初任地の仙台放送局に戻り、震災10年を超えた東北を伝えていこうとしている。